

事例紹介

弘さん 78 歳

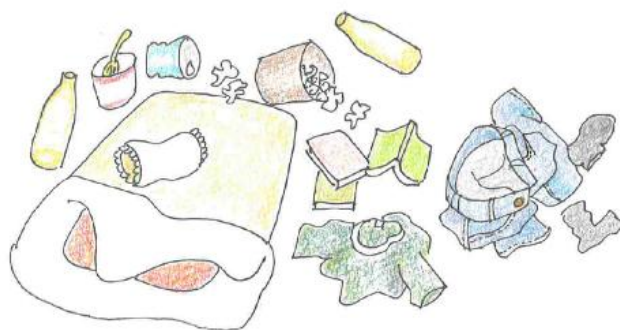
軽度のアルツハイマー型認知症

独居。子は二人(長男、次男)いるが、二人とも家庭を持ち、盆と正月くらいしか会わない。75 歳まで働き、退職後は車でいろいろなところに出かけることが趣味であった。友達同士の集まりにも参加するなどして活発に過ごしていたが、76 歳の時に対物事故を起こしてしまい、運転する気力をなくし免許を返納した。その後新型コロナウイルス感染症の感染拡大もあり家で過ごすことが増え、一日中寝て過ごす日も多くなった。

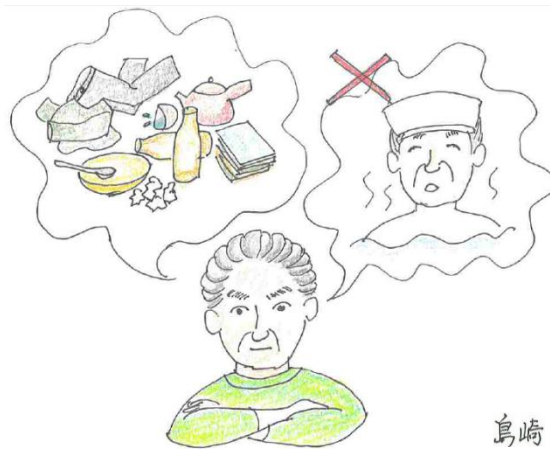
78 歳の正月、久しぶりに息子らが弘さんの家に集まったところ、家の風呂釜が壊れて弘さんは最近風呂に入れていないことが明らかとなった。またこれまで几帳面だったのに家の中が乱雑に散らかっていた。弘さんは「寒くなってきたから風呂は入らなくて良いのでそのままにしている」「大掃除の途中だったんだ」と言うものの、息子らはしっかり者だった弘さんの変わりよ

うにびっくりした。「元気がないようだし、診てもらった方が僕らも安心だから」と息子らは説得し、正月明けにクリニックで相談することになった。(高血圧で10年くらい診てもらっている)かかりつけクリニックで長男が院長先生に弘さんの最近の様子を伝えた。院長先生からは「実は診察日の間違いや薬をなくしたと言うことが増えていた。もの忘れのせいで家が散らかっているのだと思うが、うつ病との見分けが難しいので精密検査を受けた方が良い」と言われ、認知症患者医療センターを紹介してもらうことになった。

認知症患者医療センターを受診し、弘さんは記憶力の検査や脳 MRI、血液検査を受けた。



島崎



島崎

記憶力の検査は頭がすっきりせず上手く答えられない問題も多かったので落ち込んだが、よく出来たなと思う問題もあった。検査の結果、軽度のアルツハイマー型認知症と診断された。両側の海馬が萎縮しており、昔を思い出すことは問題ないが 10 分前の事を思い出す(覚えておく)力が落ちているらしかった。「まさか自分が」と思ったが「閉じこもりがちの生活が良くなかったのかな」と思うところもあり、週に 2 回ほど入浴がてらデイサービスに通い、外出してみることにした。そのために地域包括支援センターの人と相談して要介護・要支援認定申請を行った。また抗認知症薬の内服も可能とのことだったので「少しでも効くなら」と思い、飲み始めることにした。新しい薬は飲み忘れそうなのでかかりつけ薬局で相談したところ、薬をひとまとめにする一包化(いっぽうか)やお薬カレンダーを提案してもらい飲み続けることができた。

アルツハイマー型認知症と診断された当初、弘さんは「これでもう何も出来なくなるのでは？」と不安でいっぱいだったが、なるべくもの忘れを悪化させないようにいろいろな対策を立てたことで少し安心することができた。またそれ以上に、もの忘れが悪化しても(あるいは認知症以外の病気になったとしても)息子らやケアマネージャーさん、その他いろいろな人に相談できるようになったことは弘さんにとって心強いものだった。今後はかかりつけクリニックで抗認知症薬を処方してもらい、半年に 1 回認知症疾患医療センターで定期検査を受ける予定である。